



宮城県東松島市の仮設住宅で開催された「ふれあい喫茶」。撮った写真をその場でプリントし、プレゼントする取り組みも。

仮設住宅で暮らす人たちに 心和める“ふれあいの場”を――

コープネット事業連合 さいたまコープ

被災地支援の一環として、被災地の生協と協力しながら、仮設住宅で「お茶会」などを実施する取り組みが行なわれている。宮城県東松島市で開催された、コープネット事業連合とみやぎ生協が共催する「ふれあい喫茶」と、福島県南相馬市で開催された、さいたまコープとコープふくしまが共催する「ふれあいひろば」の様子取材した。



「ふれあい喫茶」参加スタッフは、被災者の方が1人にならないように配慮して、声掛けをしていた。

コープネットの 「ふれあい喫茶」

コープネット事業連合（以下、コープネット）は、みやぎ生協と共催し、宮城県の仮設住宅で「ふれあい喫茶」というお茶会を月2回ペースで行なっている。開催地は、宮城県東松島市にある仮設住宅「グリーンタウンやもと1」。この仮設住宅には、大きな津波被害を受けた大曲浜おおまがりはまの人びとの多くが住んでいる。

2011年11月21日の「ふれあい喫茶」には、コープネットグループの職員から参加者を募り、コープネット、ちばコープ、コープとうきょう、コープながのから6人が参加。前日に現地入りした参加スタッフたちは、みやぎ

生協・蛇田へびた店（石巻市）でお茶会用の菓子などを購入。その後、仮設住宅の居住者たちがかつて暮らしていた大曲浜を視察した。

「荒れ果てた光景が見渡す限り広がり、衝撃を受けました」と、ちばコープ・福祉事業部の川本薫かみもと かつむるさんは、その様子を話してくれた。まだがれきが片付いていない大曲浜の状況を目の当たりにした参加者たちは、復興への長い道のりと、津波がもたらした被害の大きさを実感することとなった。

翌日の午前10時、「ふれあい喫茶」が「グリーンタウンやもと1」の集会所で開店すると、続々と仮設住宅の人たちが訪れた。6人の参加スタッフは、お茶を作る、運ぶ、話をするなど、役割

分担し、見事なチームワークで運営。当日は、みやぎ生協による組合員の集會「こ〜ぶのつどい」、松島市医療生協による「健康相談」も行なわれ、「ふれあい喫茶」には75人もの被災者が訪れた。

ちばコープ・高津介護センターの君塚法子きみづかのりこさんが、被災者の方々と交流した感想を教えてください。



仮設住宅の被災者の方々の話に、熱心に耳を傾ける。



みやぎ生協「こ〜ぶのつどい」も同時に開催。組合員から寄付されたタオルや茶碗などが被災者に提供された。

「ふれあいひろば」
コープふくしまと共催

一方さいたまコープは、コープふくしまとの共催で、福島県の仮設住宅で「ふれあいひろば」を月2回開催している。職員ボランティアが、南相馬市で4月以降毎週継続して活動してきた中で、現地のボランティアセンターから「すべての世代が参加できる場、親子で

「震災の話を伺うのは遠慮した方がいいのかなあ、という気持ちが最初はありました。しかし、皆さんむしろ率先して話してくれました。被災者の方々には、震災時の状況や、仮設住宅での生活を、多くの人に伝えたい気持ちがあるようです。大曲浜を見て、人間の無力さを感じましたが、その後仮設住宅で強く生きる人びとの姿を見て、人間の強さを感じました」



「ふれあい喫茶」終了後、コープネットの参加者と、みやぎ生協の組合員とで、今後の打ち合わせが行なわれた。



さいたまコープのボランティアに教えてもらいながらのボール作り。

参加できる場」づくりへの協力を打診され、10月から取り組んでいるものだ。事前の聞き取りから、県内の仮設住宅では次のような問題があることが見えてきた。①小規模の仮設住宅ではボランティアなどが行なうイベントが少ない。②さまざまな地域から来た人が暮らす仮設住宅では近所の交流が少ない。③放射能汚染の影響で子どもたちが遊べる場が不足している。——こうした状況を受け、イベントの少ない小規模の仮設住宅で、人びとが交流するひろばを開催することになったのだ。

11年11月26日、南相馬市の仮設住宅「牛河内うしこうち第四」で第3回目の「ふれあいひろば」が開催された。当日は、さいたまコープの「子育てひろば」に関わる組合員・職員と、埼玉県内の学童保育指導員2人の、いわゆる子どもと



被災者に手作りの靴下カバーを届ける活動、「温もり届け隊」の支援品も配られた。

遊ぶエキスパート」が参加。仮設住宅の子どもたちは、こうしたスタッフに教わって、工作やペーゴマなどの遊びを楽しんだ。時間がたつにつれ、子どもたちは自然と外に出て、スタッフにリードされながらボール遊びや鬼ごっこをしたり、大きな笑い声をあげながら遊んでいた。これまで、仮設住宅の中で、子ども同士が集まって遊ぶ機会はほとんどなかったようだ。遊んでいた子どもの母親の1人は、「学校でも、校庭の活動時間には制限が設けられています。こんなに外で思いっきり遊んだのは、本当に久しぶり」とうれしそうに話してくれた。また、集会所での「ふれあい喫茶」には折り紙も用意され、「折り紙を折ることをきっかけに、知らない人とも気軽に話ができた」と好評だった。



「ふれあいひろば」に参加したメンバー。



学童保育の指導員らに教えてもらいながら、福島仮設住宅の子どもたちはベーゴマやボール遊びに夢中。



この日は、大人18人と子ども8人が「ふれあいひろば」を訪れ、楽しい時間を過ごした。

**被災地の支援を通して
生協で働く意味を考える**

コープネットの「ふれあい喫茶」に参加した、コープながの・松本センターの小野澤文字さんは、「被災者のお婆ちゃんが、こうおっしゃっていました。『住む場所も、食べる物も、物質的な援助は文句のないほど頂いて感謝しています。でも、夜1人になったとき、ど

うしようもない絶望に襲われます。こ
うやって、ときどきお話を聞いていた
だけののが、大きな心の支えになっ
てるんです。そんなお話を聞いて、生
協は本当に意義のある取り組みをして
いると感じました」と話してくれた。
お茶会の終了後、「また参加したい」
という多くの声が聞こえた。仮設住宅
の被災者との交流の中で、参加スタッ
フたちはそれぞれに、普段の生活の中
では得難い何かを得たようだった。
さいたまコープの「ふれあいひろば」
事務局を務めた、参加とネットワーク
推進室の越智秀克さんは、「私は、つい

先日まで宅配センターのリーダーとし
て働いていました。現場ではどうして
も目の前の数字に追われていて、組合
員さんの生活に関わるといふ生協で働
く意味や楽しさを追求しきれしていな
かったと思います。被災地の支援に関
わるようになってから、その意味をも
う一度考えることができるようになり
ました」と話してくれた。
被災者の方々を支援するため開催さ
れるふれあいの場合は、同時に、支援す
る人間にさまざまな気付きをもたらし
ている。

(文・写真 野口武)

さまざまな思いを、 今後の仕事に

津波でアルバムや写真を流されてしまっ
た方々のため、その場でプリントできる機械
を持ち込んで、撮った写真をプレゼントしまし
た。写真を見せ合って喜んでくださる姿が、
とても印象的です。また、スタッフとして「ふ
れあい喫茶」に参加した方々も、被災者との
交流を通してさまざまな思いを抱いたよう
です。この経験を通して得たものを、今後
の生協の活動に生かしてほしいと思います。



コープネット事業連合
危機管理室 防災担当
桜井博孝さん

たくさんの人の力で 開催しています

毎週、南相馬市を訪れ、がれきの撤去や
流出品洗浄などに従事している職員のボラ
ンティアが、作業後に仮設住宅でチラシを
配付したり訪問をして、「ふれあいひろば」
のお知らせに協力してくれています。さま
ざまな人の思いや力から、ひろばの開催が成
り立っています。より多くの人が、支援を通
して生協の中でできることを考えていけたら
と思います。



さいたまコープ
参加とネットワーク推進室
越智秀克さん

お詫びと訂正

1月号「東日本大震災・復興レポート」記事、P.25写真上のキャプションに誤りがありました。ヘルメットをかぶっている2人は伊達市の職員ではなく、コープふくしま・住宅部の職員です。お詫びして訂正いたします。